

私は、身体の欲望を生命の欲望へと変換する道筋について語ってきた。欲望との対決の次元においては、この営みを継続するしか突破口はない。しかしながら、この戦いを貫こうとする者の内側から噴出してくる身体の欲望は、はかりしれないほど大きい。生命の欲望への変換の努力など、一瞬にして吹き飛ばしてしまうほど強力だ。もつと物がほしい、楽をしたい、他人より優位に立ちたい、快楽にしがみついていた、他人を手足にして欲望をかえたい。それらの怒濤のようなエネルギーは、「生命の欲望への変換」を頭で考えているこの私の存在を、根こそぎすくいとつていく。気がついたらすでに身体の欲望のとりこになって、がつがつとそれを食らっている自分がいる。所有し、肥え太り、そこに開き直り、そのこと全体から目をそらそうとしている自分がある。

身体の欲望の大きなうねりに完全に流されながら、見えざる岸に向かって何度も何度もロープを投げようとする試みを、われわれは遂行し続けることができるのだろうか。欲望の変換作業とは、身体の欲望に足をすくわれ、急流に流されながら、はるか遠くにあるはずの生命の岸辺へとロープを投げ続けることである。スイマーは流れに逆らって泳がない。流れにそって泳ぎつつ、手探りで徐々に岸辺へと脱出しようとする。しかし、どこに岸辺がある

のかを、泳ぐ者はけっして見ることができないであろう。飛沫の彼方に見えるのは、ますます大きく盛り上がる無痛奔流のうねりのみである。

無痛奔流との戦いは、ちょうど、「捕まえようとする者の力を利用して逃げていく敵」との戦いのような様相を示すにちがいない。あるいは、「殺そうとする者の力を利用して強くなっていく敵」との戦いのような様相を示すにちがいない。このとき、無痛文明の解体をめざして戦う者たちは、みずからがいったい何をしようとしているのかを、真に思い知ることになるだろう。そして、この戦いの真の意味を、はじめて存在の奥底から了解することであろう。